

儀式・祭礼・娯楽

ウシを殺して豊作を願う、収穫を祝う、雨乞いをするといった儀式や祭りは世界各地で行われてきました。日本でも延暦 10 年(791)に出された詔勅^{しやうちよく}に「断 伊勢、尾張、近江、美濃、若狭、越前、紀伊国百姓、殺牛用祭漢神」と記されており、伊勢や尾張などでウシを犠牲とする祭りが行われていたことがわかります。また、特に雄ウシは、力強く逞しいことから、古くから創造力や生殖力の象徴として信仰の対象となってきました。

ウシに関わる祭礼・娯楽として代表的なものは、やはり、闘牛でしょう。闘牛には、ウシと人間が戦うものと、ウシ同士を競わせるものの大きく分けて2つあります。

ウシと人間が戦う欧州の「闘牛」の起源は、神格化された雄ウシとその流れる血の豊饒性に対する信仰があるとされるほか、狩猟起源説、ローマ文化の名残などの説があります。スペインでは、18 世紀に闘牛の習慣が整理され、様式化、職業化され、国技とされるほど人気のある娯楽の一つでしたが、最近では動物愛護の観点などから人気が低下し、カナリヤ諸島やカタルーニャ州において闘牛禁止法が成立するに至っています。切手としては、スペインで 1960 年に発行された闘牛の様々な場面や技をモチーフとした 16 枚のシリーズが圧巻です。スペインなど欧州の文化の影響を受けたチリやタンザニアからも闘牛の切手が発行されています。

稲作文化圏であるアジアでは、2頭の雄ウシを競わせる闘牛（牛相撲、牛突き、牛の角突きともいう）が広く行われており、日本では岩手県久慈市、新潟県（長岡市、小千谷市）、島根県壱岐島、愛媛県宇和島市、鹿児島県徳之島、沖縄県で現在も行われています。その起源は、ウシの習性を利用した自然発生説、農耕用のウシの鍛錬のため、荷役運搬の群れの先頭に立つウシを決めるため、種牛を選ぶため、神様への奉納、アイヌの遺風、大陸由来など地域によって様々に伝えられています。現在では、闘牛はいずれも人々の大切な娯楽となっています。日本では、戦後のアメリカ軍統治下で沖縄に置かれた琉球政府から 1960 年に丑年用の年賀切手（琉球切手）が発行されています。このほか、1996 年発行の年賀切手が琉球張子のウシオーラシ（闘牛）をモチーフとしていますが、本展では「新年/丑年」の分類で紹介しています。

稲作との強い結びつきを示す行事としては、日本で 1993 年に発行されたふるさと切手の図案となった壬生の花田植があります。ユネスコの世界無形文化遺産にも登録されている農耕儀礼で、豪華な花鞍で飾ったウシで代掻きをし、太鼓や鉦で囃して田植え歌を歌い、着飾った早乙女が田植えをします。牛の博物館の常設展示で展示している花鞍には「農」と「寶」の文字が描かれており、ウ

シが農業の宝として大切にされてきたことが分かります

インドネシアから 1961 年に発行された切手に描かれているのは、ケラパンと呼ばれる競牛です。2頭立ての橇に人を一人乗せ、110m (決勝は 120m) を一気に駆け抜けて速さを競うもので、その速度は、100mを9秒で走るといいます。このレースに用いられるマズラウシは、マズラ島で成立した地方品種です。古いジャワ在来ウシ、バリウシ、インドのゼブー（瘤牛^{こぶうし}）の影響を受けているとされ、このレースが地方品種成立の要因となったと考えられています。

オーストリアの初日カバーの切手には、チロル地方で夏の間放牧されていたウシを村の牛舎に移動する際のパレードである牛おろし祭り (Almabtrieb/アルムアプトリープ) が描かれています。大きなカウベルを付けたスイスの切手も移牧時の装束でしょう。

ロデオは、カウボーイが自慢の腕を披露する遊びから発展したスポーツです。フォークランド諸島の切手に、暴れウシを乗り越なすロデオとウシを投げ縄で捕獲する様子が描かれています。

ブラジルの切手は、アマゾン川流域のパリンチスで行われるボイブンバをモチーフにした観光切手でしょう。ボイ (Boi) は雄ウシ、ブンバ (Bumbá) は太鼓の大きな音や大騒ぎという意味で、雄ウシの死と再生にまつわる民話を歌や踊りで歌う「牛遊び」にルーツを持ちます。1960 年代から、白い雄ウシがシンボルの赤組 (ガランチード) と黒い雄ウシがシンボルの青組 (カプリショーズ) がそのパフォーマンスを争う対抗戦として開催されており、どちらが勝つか、町の最大の関心事となっています。

このように、ウシは労働力や畜産物を与えてくれる他にも人間と深く結びついているのです。